

若柳町内 迫川の白鳥について

増 森 彦 介*

1. 若柳町内の迫川と白鳥

若柳町の迫川は市街地の中心部を流れ、橋を中心にして兩岸には警察署・役場があり、料亭・民家が立ち並び、北上川から迫川へと石巻からの舟便の陸上基地として文字通り宮城県北部の中心都市として栄えてきましたが、迫川の度重なる氾濫により下流の地域が水害に苦しむことの連続で、戦後30年ぐらい前から川幅の拡張が行なわれてきましたが、若柳町以外の上流・下流は全部工事がおわり5・6年前より町内の兩岸の工事が始まりました。春には花見・夏は涼しさを求める迫川の岸も年毎に変わります。以下若柳町の白鳥の事を若柳町概図(第1図)のA・B・C・D・E・Fで説明してみます。

昭和48年頃商工会でコブ白鳥・アヒル等を買入れて白鳥を呼び寄せる計画を立てましたが、エサを与える役目の人がおらず自然のエサだけなので餓死するコブ白鳥もでる始末で、見かねて私が餌付けを行ないました。橋の上流B点が役場跡地で、ここが放鳥地です。その年の11月オオハクが3羽飛来しましたが、これが若柳町に於ける白鳥飛来の始まりです。以後毎年確実に増えつづけて昭和57~58年はB点に350羽ものオオハクチョウがきましたが、コハクチョウは数えるぐらいもきません。

コハクチョウは東北本線の鉄橋の下手500メートルのCの地点の所に、伊豆沼(第1図の左下)に白鳥がくる以前から20羽前後が飛来していたのですが、Bのあたりで投餌するものが流下するのでつられて川をのぼってきて6・7年前より大橋の下手のA点のあたりに居つくようになりました。A点はコハクチョウが多く600羽ぐらいを数え、オオハクチョウは200羽ぐらいです。A点は目の前から飛び方のうまいコハクチョウが主役になるわけです。オオハクチョウは、主として橋の上手B点の所にいるわけですが、Aにくる時は一度橋の前に並んで上流に向かって飛び出し、空から橋を飛び越えて下手のAに着水するのです。また、AからBに帰る時には図中の×印の所あたり迄さがってから飛びだすと普通の風の場合にはうまく橋を飛び越せるようです。

ここでまた若柳町の地図を見ていただきます。迫川の南のDの印のある一帯はコハクチョウやオオハクチョウがエサを食べに下りる田であり、北のEと印してある辺り一帯はガンが降りている所で、白鳥が混じっていることもあります。また、右上隅のFは若柳町より北方にある山(岩手県花泉町油島)に3年前にできた人工的な約1町歩(約9.9アール)ぐらいの新しくつくった用水堀りですが、2年程前より50羽前後の白鳥が降りて越冬しております。

今年(昭和57年)12月より58年3月迄B点に於て、橋脚の基礎工事が行われました。土台工事の為、

* 〒989-55 宮城県栗原郡若柳町中町7

Masumori Hikosuke

7 Naka-machi Wakayanagi-chō Kurihara-gun, Miyagi-Prefecture 989-55

地下水を汲み上げて迫川岸より流しました所、水の流れに沿って寒い1月・2月のさ中にも青々とした草が発生しておりました。大雪が降っても地下水の流れの為に青草は白銀の中に目立ちましたが、この草を目がけて白鳥・アヒル・カモ等が上ってきて草を食べるのには驚きました。工事の雑音・パイル工事等何のそのです。青草を目の前にして首を曲げ、口いっぱいにはくばって一気に草を引きちぎって喰べます。まるで山羊か馬のようでした。迫川は毎年8月10日頃、流澄花火大会見物のため土手の草刈りをします。この為11月・12月・1月になっても草が青く残ります。朝早く白鳥が岸に上っているのは陸の草を喰べる為とは思っていましたが、汲みあげた地下水の流れに生えている青草を白鳥が集団で上って喰べるのもむべなるかなと思われました。沼などでなく落穂などでない田などに着地している白鳥が何を喰べているのか理解することができました。

また、本町内の迫川に於ける給餌はここを通過する白鳥達にとっては、格好な休憩地になっているようです。即ち10月から11月にかけて南下する鳥、3月から4月にかけて北上する白鳥で迫川でひと休みしていく数は3千羽及至4千羽に達するものと考えられます。

甲論乙駁とはいえ町内の人々が他の町に行き行って自慢する時は、「迫川は白鳥で埋まって川の水も見えなくなります」などと言って居ります。それ程でもありませんが、飛来数が年毎に増加していることだけは事実であります。

若柳大橋付近の拡大図も示しておきましたので参考にいただければ幸いです。

2. 迫川(若柳町)のコブ白鳥について

現在、迫川に居るコブハクチョウはC点で巣立った若柳町で買ってきて放鳥したものの子供です。橋の下をくぐって飛びまわり、また泳ぎまわっているのが飛来した白鳥も真似をして飛び抜けるものも出る始末です。C地点で昭和53年5月にコブハクチョウの二世が生まれました。迫川では親は毎年毎年卵を生んできましたが、川の雪融け増水によって駄目でしたが、この年だけ2羽生れ、1羽は7ヶ月で死にましたが、1羽は生き延びました。町内の人々は川から北に帰るから、または逃げ出すから親のように羽根を切るようにと言われましたが、本当に逃げ出すか、北に行くかを知りたくてことわりました。鳥の様子を見ていました所、それが良い結果となりました。と言うのは、8ヶ月後の次の年(昭和54年)の1月初め、「子別れ」がはじまりました。3・400羽いるオオハクチョウ・コハクチョウの集団の中から親は自分の子供を探し出して川全体を追い立てますが、追い詰められると子供は羽根を用いて飛び上り、餌付場に飛んできて餌を喰べます。両親共いまだかつて見た事のないケンマクで子供を追い出しにかかります。ただ親は羽根を切られている悲しさ、飛んでにげる子供をそれ以上追いかけることができないわけです。親も、特に子供も人工的な餌を主食として居りますが、一年中私の餌を喰べている訳ではありません。親鳥は例年3月初めに卵をかかえるために下流域で巣作りをはじめると、迫川の天然の餌を喰べます。8月10日頃迄は、町内には出てきません。鉄道鉄橋下手のC点あたりで暮しているのです。「北への方へでも帰ったつもり」でいるのでしょうか。親鳥は羽根を切つてあるのでこうなるのかと思っていましたが、飛べる二世のコブハクチョウもこれは親とは反対に大橋の上流500メートル位の所に4月中旬より8月10日前後迄行って居ります。二世は3月中旬頃より4月始めにかけて、オオハクチョウやコハクチョウと共に編隊を組んで飛びまわり、今年こそ北に行くかと思った時もありましたが、4・5日すると1羽だけで帰ってきます。伊豆沼は勿論

青森辺り迄も遊びに行ってくるようです。(他の土地で、人が声を掛けたら寄ってくるコブハクチョウを見掛けましたら御一報下さい)。

つまり給餌にたよっている鳥でも、季節によっては人手を離れて自然食を主体にすると言うことで、自然食が容易に得られない厳冬期は人をたよることがあっても、本来の習性を一朝一夕に失うようなことは無いということであり、このことは越冬の為に飛来するオオハクチョウやコハクチョウについても言える事だと思えます。

3. 伊豆沼の白鳥

迫川の白鳥と無縁ではないと思えますので、伊豆沼の白鳥について若干記しておきます。

伊豆沼は上流の築館町より流れ込む生活用排水で汚され、沼岸は全部観光道路にされる等、開発が進み過ぎた観があります。総て人間優先で自然の保全や鳥の事などは二の次、三の次の状態です。伊豆沼は戦後3・4年は進駐軍の兵たちがカモをうつのに自動小銃を発砲していましたので、1羽も鳥は居つなくなってしまうました。勿論白鳥はいませんでした。昭和25・6年頃伊豆沼のフナやライ魚を食べた人々の間に肝臓ジストマが発生し、沼の風土病だから沼や川の魚は食べぬようと、町や県の保健所の指導がありましたので、沼の魚は売れないし釣らないので沼の漁業は完全にすたれてしまいました。

昭和28・9年頃、伊豆沼に白鳥が飛来しだしたことに気付いた新田(にった=東北本線)の有志の努力により3羽・10羽と増えつづけて来ました。又、ハスや藻なども増えて鳥も集りだしたのです。当時は餌にするパン屑や米屑なども商品価値が無く、ガソリンも安かったので農家の人々も白鳥がめずらしいので見物がてら沼迄、餌として運んでくれる程の厚意を示していました。ところが3・4年前からパン屑は犬の餌に、又米屑等も商品価値が高まったので農家では、庭先で売払ってしまい思う程に餌としては集まらなくなってしまいました。一方これも4・5年前からですが、沼周辺の漁業家がエビやフナ等が売れだしたので、観鳥センターの前までフナなどを満載して小舟で乗り付け、観鳥に集まった人々に売込みを計って居ります。沼に憩っている白鳥はこの動きまわる舟を大変きらっているように見受けられます。又昭和55・56年の7・8月の出水に因って沼のハスや藻類が全滅したなどと言っておりますが、広い沼ですが大きな大きな地引網をかけて沼底を引きずっております。これではハスも藻も駄目になってしまいますし、発生するわけもありません。

ラムサール条約の話が出てからは、伊豆沼周辺及び若柳町内農家の一部の人々がにわかには鳥害を力説しました。現在も若柳町では、幾許かの補償はしています。結局重要湿地の指定は見送られてしまいました。湿地が指定されたからといって、どれ程鳥害が増えるというのでしょうか。かけがえのない自然、子孫に残し引き継ぐべき自然の保護はここでもまた足踏み状態となってしまいました。

4. 人工給餌について

次に餌付け(給餌)についてですが、当若柳町に於ても愛鳥会員とか自然保護員などの方々は餌付けすることは悪であり、自然の鳥の生活サイクルがくるって鳥が過保護になれて、厳しい自然環境を生きぬけなくなって減少してしまふ、またそうしたことは不自然であるなどと言って居ります。伊豆沼や迫川、最近に出来た用水堀りに迄白鳥が定着しそうな気配が見えるのは何故なのでしょう。日

本白鳥の会の会員の中には“最近白鳥の分散越冬が目立つ”と指摘している人も居ります。私は自然が不自然になった（例えば八郎潟のような白鳥たちの集団越冬地を人間が破壊してしまった）ことが原因ではないかと思っております。現在の日本には鳥たちの生活の場・集団での越冬可能な自然、潟・湖・沼がどれくらいあるのでしょうか。人の手の加わらない所などほとんど無いのではないのでしょうか。名画ミレーの晩鐘や落穂ひろいのような風情は見ることはできなくなりました。田には落穂などはありません。農業機械が発達し過ぎて一粒の米も落ち残ることはないのです。自然の餌が得られるような季節になれば、白鳥たちは給餌場を離れ自活することはすでにコブハクチョウのところで見た通りです。大形の鳥程餌不足は致命的であるとも言われています。

給餌することが白鳥の生活サイクルをくるわせるのだとするなら、パイル打込みの轟音にもたじろぐことなく、敢えて人に近づくことは自然なののでしょうか？ 白鳥たちの生活サイクルの一部はすでにくるっているのであり、その元凶は人間なのです。迫川に限らず、各湖沼川の給餌場に姿を見せる白鳥はすでに自然の鳥とは言い難いといえます。彼女達のねぐらを食糧もろとも奪ったのは人間でありますから、何らかの方策を立て、補償してやるのも亦人間でなければならぬし、それは人間でなければできない事だと考えています。理屈・議論・批評等それも結構でしょう。しかし、現時点では一挙手一投足をもってする以外に白鳥達を守ってやることは困難だと思っております。

5. 迫川に於ける自然餌の発生について

最近判明したことですが、本町域内の迫川では毎年1月20日頃より2月5日までの間に川の流れる砂底の上、橋杭や石等に藻が発生します。寒い冷たい流れの中に発生し、白鳥はそれを喜んで喰べて居りますが3月10日前後には発生が止まり元の川にもどります。この藻が無くなりますと白鳥の北への旅立ちが始まります。栗原農業高等学校の生物の先生に御研究願いましたが、図鑑、参考書等にも該当するものは無く、強いて言えば緑藻類のデスマジウム（接合藻目チリモ）、アプトゴニウス又はアオミドロ（接合藻目アオミドロ）の一種ではないか？とのことでした。県の保健所・環境保全課でもそれ以上のことはわからず、東北大の生物研究所に行きなさいとの事でしたが、すでにサンプルも無くなってしまい来年春まで結論はもち越すことになりました。緑藻類はクロレラ、タンパク質の塊りで白鳥にとっては栄養満点の食料です。シベリアに行つてすぐ卵を生めるのもこの藻を喰べているからだと思われまふ。

川の流れが凍るような寒い時活発に出現し、雪融け水で増水しだすと発生しなくなるのです。北海道や他の地域でもこの様なことがあるのでしょうか。様子が知りたいと思います。

昔、2月中旬頃畑岡中学校の先生方が伊豆沼で死んだ白鳥を開いて見たら、食道内に木屑がつまって居り、それが原因で死んだと言う報告を耳にしたことがありました。この藻が沼の木の棒に発生したら白鳥は喜んでその藻を喰べますし、その時棒の腐った部分もいっしょに喰べ、それがつまって死んだのではないかと。それなら話しが合うような気がします。迫川では、この藻が発生しはじめると、主食は藻に切りかわり米やパン屑はあまり喰べなくなります。

この藻の研究がすすめば、越冬期間中の食糧については自然餌を主にすることができて、鳥・人間双方共好都合で安心できるのですが。

6. 白鳥の習性的一端

コブハクチョウの橋のくぐり抜けについては前にも書きましたが、飛び抜けにしても泳ぎぬけにしてもこのようなことを始めるのは全部幼鳥たちです。20羽・30羽・50羽とコブハクチョウもオオハクチョウも飛び抜けるものが増えていきます。なかなかの見物であります。

次に、いかに公共的な工事とはいえ地形が堤防が、そして町並みまでが変化し続ける若柳町市街の中心部によくも白鳥達が飛来するものだと感心しております。花火の打上げ中でもパイルの打込み中でも平気で着水してくるのは、その音の強弱や地形の変貌が直接白鳥達に害を及ぼすことが無い事を知り得た為でしょうが、一方そうしたことをいちいち苦にしている日本での越冬は完了できないという現実的な姿なのでしょう。

南下、北上の途中に迫川に立寄る編隊間では、弱い編隊長のいる群れは、後着群であっても気の強い編隊長のいる群れに給餌場を追い出されるのを見掛けたこともあります。また、これも毎年見られることですが、他の出発地や途中の休憩地でもそうなのか分かりませんが、多分驚いたかつられて飛び出して親とはぐれて、他の家族についてきたらしい幼鳥が餌場で実子と差別され追い出されているのも見掛けます。親切な白鳥も餌のことになるのと別のようで、大戦中の人間の生きざまが思い出されました。

大橋の下を単独で、或は15羽・20羽の編隊で飛び抜けるというようなことはここ迫川で身につけた業で、白鳥にも結構冒険心や他の者のやらない事を行なって、いさゝか得意になっているのではないかなと思うとほゝえましくなります。

7. 私と白鳥

私が白鳥とかかわり合いをもつようになった発端については先に記した通りですが、物好きと言うか爾來毎年エサ集めを独りでやっております。10日に1度は仙台のパン屋さんに屑パンを集めに行きます。白鳥も300羽や400羽の内は良かったのですが、年毎に数が増え最近では10万円単位の餌代がかかるようになり、写真も煙草も酒も止めました。酒や煙草は身体には悪いことは知りつつも仲々止められませんでした。一石二鳥と言うところでしょうか。昨年はライトパンで170台分。約45トンでしたが、今年(48—49年)分として50トンを目標にしてエサ集めをして居りますが、昔日のように無料で分けてくれる人が少なくなって困って居ります。町広報・新聞・商工会のチラシ等、又テレビやラジオでも応援を願ってもあまり反応がありません。そうした中であって、毎年多量のクダケ米やシイナ等を無料で協力して下さる農家の皆さんには心から感謝して居ります。30トン位になるでしょうか。農家の皆さんのお力添えが無ければ、私の白鳥への給餌活動はなりたちません。2月の最盛期のエサ代、1日2食分をお金に換算しますと、

$$\left(\begin{array}{l} \text{クダケ米} 3 \text{袋} + \text{シイナ} 5 \text{袋} + \text{パン} 3 \text{袋} \\ 7,500 \text{円} + 750 \text{円} + 600 \text{円} \end{array} \right) \times 2 = 17,700 \text{円}$$

にもなります。シーズンオフのたゞ今は、スズメ・ムクドリ・カラス・ハト・ヒヨドリ・アヒル等と遊んでおりますが、餌集めの方は欠かしたことはありません。

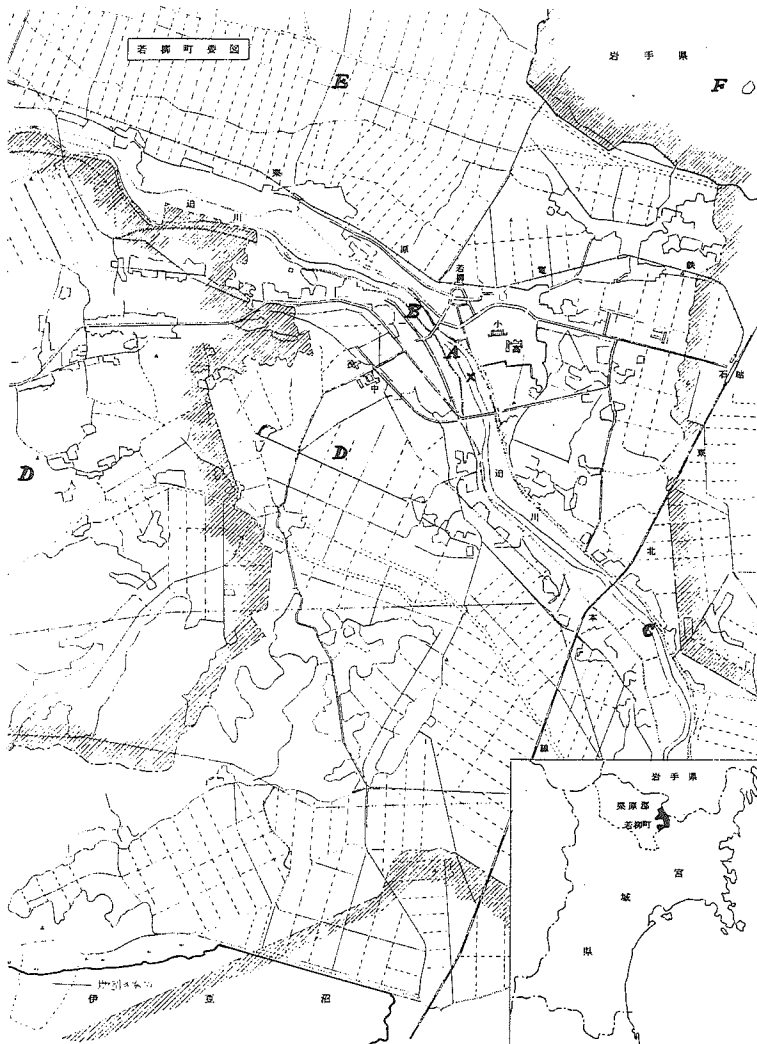
迫川を中継地として南下・北上する編隊群の中には私が声をかけると編隊が乱れ、編隊長の指導を

無視して南下（秋）の時は親鳥が北上（春）のときは子供が先頭になってチョット御馳走になりますとばかり着水し1・2回食べて又目的地に向けて飛びたって行きます。又毎年5羽及至12・3羽が電線にひっかかったり、病気にかかって死ぬ鳥もいます。こうした喜びや悲しみを乗り越えて、善意に満ちた人々に支えられながら、私を信頼して迫川に飛来する白鳥達にこれからも給餌活動を続けていこうと思っております。

付 記

本稿は58シーズン中に増森氏が寄せられた定時定点調査や数次に亘るお便りを氏のお許しを得て適宜按配して文を成したものであり、見出しの選定及び文章についての責任は私にあります。

（玉 田 誠）

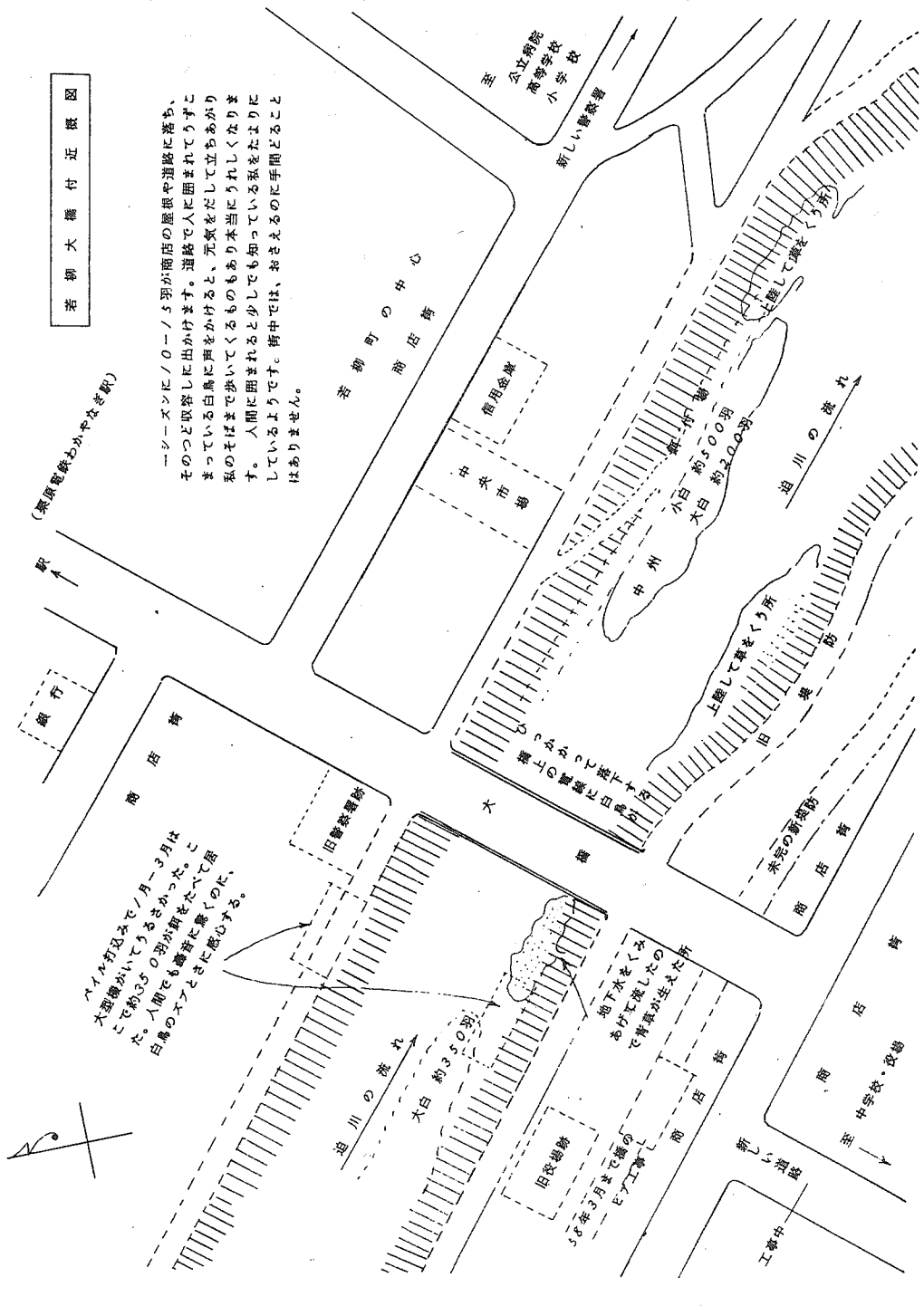


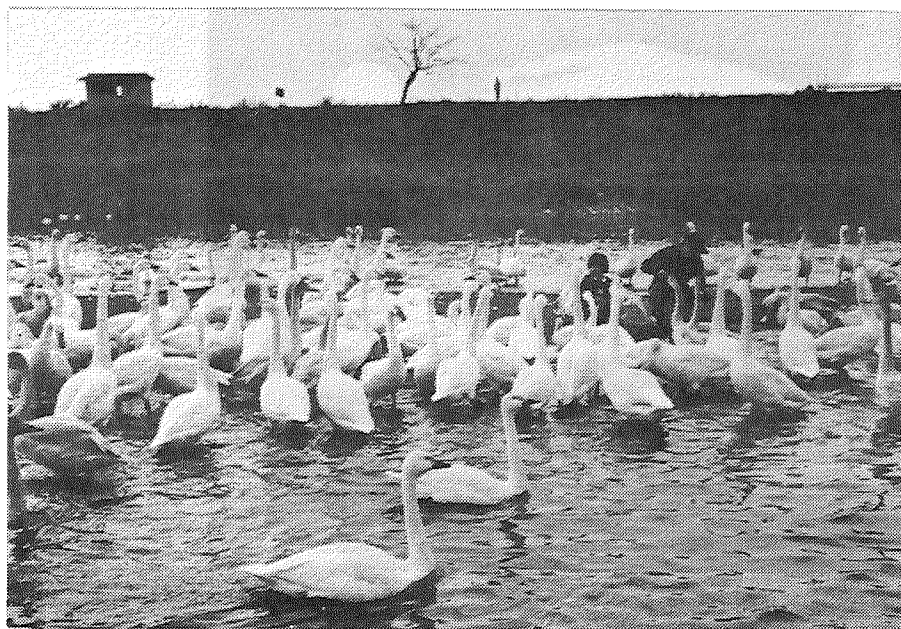
若柳大橋付近概図

(東原電鉄わかやなぎ駅)

ペイン打込みで、1月～3月は
大規模がいてうるさかった。
こで約35の羽が断をたべて居
白鳥のノアとさ感ひする。

一シーズンに100/5羽が商店の屋根や道路に落ち、
そのつと収容しに出かけます。道路で人に踏まれてうずこ
まっている白鳥に声をかけると、元気をだして立ちあがり
私のそばまで歩いてくるものもあり本当にうれしくなりま
す。人間に踏まれると少しでも知っている私をなまよりに
しているようです。街中では、おさえるのに手間とること
はありません。

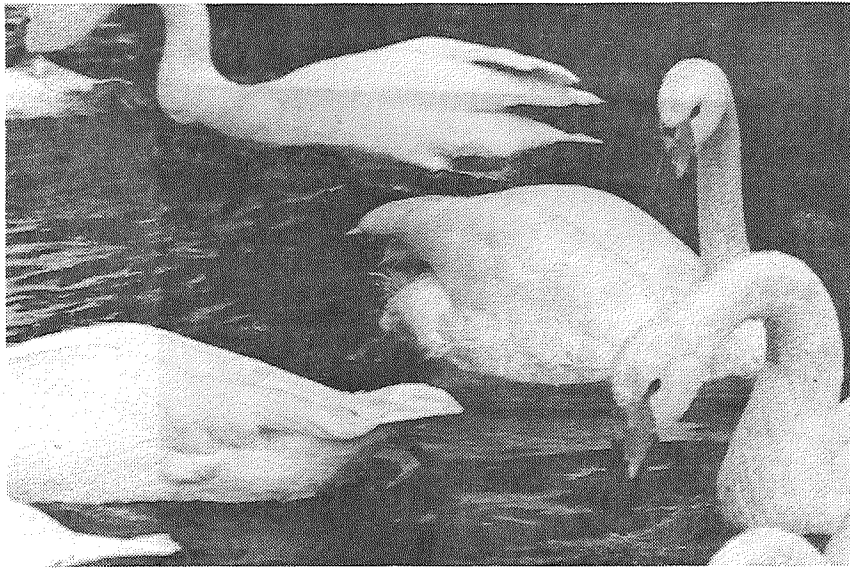




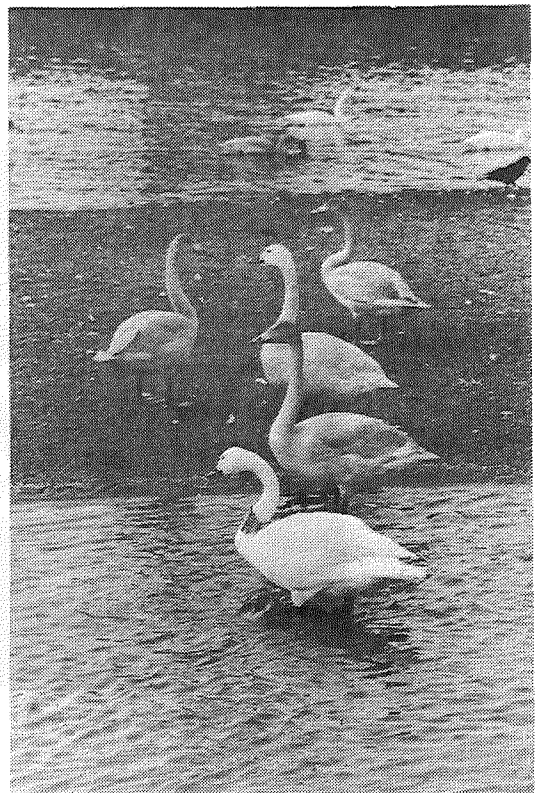
若柳大橋下手の中州給餌場の白鳥たち



若柳大橋を下手より見る（この橋の下を飛び抜ける白鳥も居る）



↑尾の無い大白 この状態で蕃殖地との間を何度か往復。58年3月6日の夕方南町の商店街の電話線に引っかかり同18日に死亡。（昨年2羽の子供を連れて来てた。）



014C一家→

（中洲と手前の5羽）あたりの白鳥に気がつかない、他の鳥が少しでも近づくと戦います。家族の中心です。